

バウハウス高円寺 (東京都杉並区)

取材文:大城諒司 photo:新井 卓

古き良き昭和の住まいをシェアハウスとして再生

アンティークショップのような空間

築50年以上の木造家屋を、いまどきの感覚でリノベーションし、シェアハウスとして再生したのが「バウハウス高円寺」だ。オープンしたのは2007年。高円寺という土地柄もあったのだろう、あっというまに8部屋すべてが埋まってしまった。今でも、空き部屋が出ると、申し込みが殺到するのだという。知る人ぞ知る人気物件である。

現在の居住者は、女性5名、男性3名。年代的には20代後半から30代前半が中心。8名の大半は日本人だが、そのうち1名はカナダ人(女性)とのこと。取材に訪れたのは、日曜日の昼下がり。休日ということで、居住者の半分が在宅していた。

お話をうかがったのは、檜館さん(女性・30代・居住年数4年)、吉川さん(男性・30代・3年半)、瀬戸さん(男性・20代・半年)、井上さん(女性・20代・4カ月)。オープン当初から暮らしている方もいれば、入居したばかりの方もいる。

まずは、どうしてシェアハウスという暮らし方を選んだのかをたずねた。

「30歳まで実家で暮らしていたんです。そろそろ実家を出て、一人暮らしを始めたと思った時期に、シェアハウスの存在を知って。敷金や礼金も不要だし、引越の荷物も最小限でいい。最初は、一人暮らしへの〈つなぎ〉のようなかたちで考えていましたが、居心地がよくて、もう3年半も暮らしています(笑)」(吉川)

「もともとシェアハウスを利用していたのですが、そろそろ引っ越そうかなと思った時に、空室が出たことを知って、すぐに申し込みました。バウハウス高円寺は、以前暮らしていたところとはまったく雰囲気違いますね。一番の魅力は共有スペースの広さ。リビングやキッチンに余裕があるし、その分、住んでいる人たちも、ふらっと集まってくる。無理せず、自然にコミュニケーションできるんですよ(井上)

木造住宅だからこそ新しい

居住者が異口同音に口にするのは「居心地のよさ」という言葉。しかし、木造住宅の場合、夏場はよいとしても、冬場の冷え



バウハウス高円寺では食器やキッチンツールなども用意されている。食材に関しては各自で管理するが、調味料は共有



最寄り駅から徒歩2分。閑静な住宅街の細い路地を入ると、バウハウス高円寺の入り口が

リビングルームの外には10畳ほどのウッドテラス。暖かい季節にはちょっとしたパーティを開くことも多い

込みは厳しい。隙間風は入ってくるし、床下からの底冷えもきついだろう。実際、「入居して最初にしたのは、窓や建具の隙間を埋めることでした(笑)」(瀬戸)という声もあるくらいだ。

居住者の大半は、古い木造住宅での暮らしそのものが初めてだという。だから彼らにとっては、一種のワンダーランドなのだろう。ある年代の人間にとっては、木造住宅での暮らしは既知のものかもしれないが、バウハウス高円寺の居住者にとっては、今までに体験したことのない未知の世界であり、それゆえ、新鮮かつ楽しいものなのだ。

「冬場はめちゃくちゃ寒いですが、視点を変えれば、四季の移り変わりが実感できるということですからね」(吉川)

「確かに季節の変化は感じますね。夏になるとバーベキュー、秋になるとお月見したりしますし」(楢館)

井上さんも指摘していたが、バウハウス高円寺の最大の魅力は、リビングやキッチン、そしてテラスなど、共有スペースの広さにあるようだ。反面、個々の部屋の広さは、3.5畳から7.5畳程度と、さほど広くない。もともと学生寮として使われていた物件らしく、部屋ごとの収納は充実しているものの、入居者のほとんどは、必要最低限のものしか置いていないという。

「僕はスーツケース一つで引っ越してきま



リビングルームは6畳ほど。
左から井上さん、吉川さん、楢館さん



タイル張りの浴室。小さいながらも
五右衛門風呂が設置されている

株式会社大関商品研究所

立花佳奈子さん

運営者の声

弊社は、飲食店の店舗設計や施工、運営を中心に、業務を展開してきました。シェアハウスに関しては、バウハウス高円寺が初めての試みでしたが、おかげさまで好評をいただき、現在では、バウハウス高円寺に加え、バウハウス南千住、バウハウス広尾と、三つの物件を運営しています。さらに今後は、横浜でも新しい物件を運営する予定です。

飲食ではなく、どうして住まいに目を向けたのか。代表の大関耕治が、バウハウス高円寺の元となる建物を見つけた時に、なにかしらひらめくものがあったようです。そもそも弊社は、飲食店の設計において、古民家のリノベーションを得意としていたので、当初は飲食店として再生させるというアイデアもありました。しかし、建物自体が学生寮としてのつくりだったので、

わざわざ飲食店に転用するのではなく、もともとの特徴をそのまま生かし、若者向けの住居として、新たに「再生」という方向性が、自然に生まれてきたのです。

内装のコンセプトは「ノスタルジック和モダン」。古い木造建築に似合う中古家具をそろえ、アンティークショップのような佇まいを目指しました。といっても、おしゃれなだけではなく、どこか懐かしく、温かみのある暮らしを楽しめるような空間にしたかった。何年も前から、スローライフというキャッチフレーズが目立っていますが、心がけているのは、「早く帰って、のんびりしたい」と思ってもらえるような家づくり。これからも居心地のよい空間を提供していきたいですね。(談)



2階に上がる階段。昔ながらの木造家屋の構造を活かしている。2階には5部屋

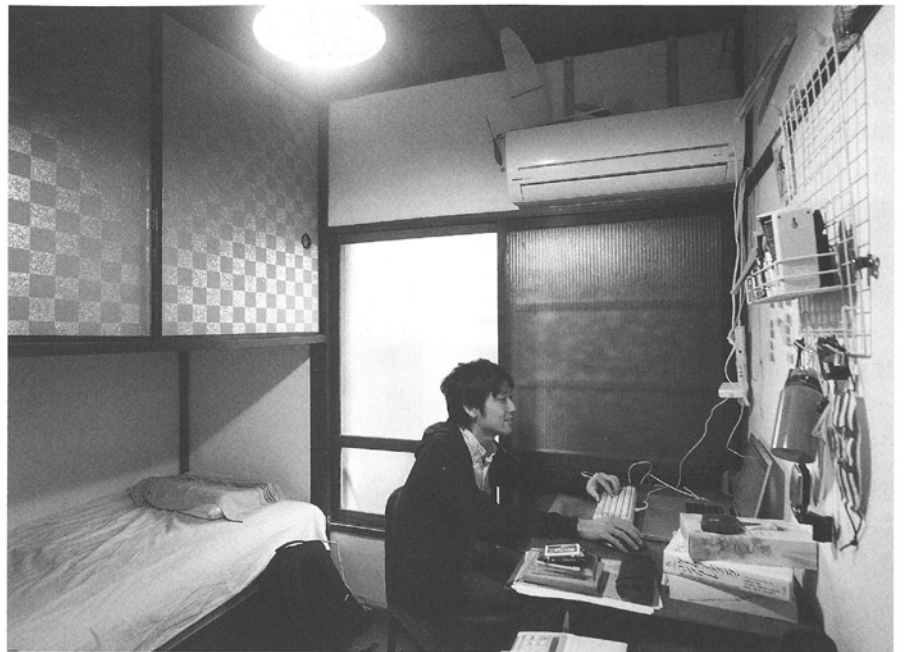
した。学生時代は一人暮らしをしていましたが、たとえば洗濯機なんて、使用頻度は少ない。それなら、共有した方が合理的だと思うんです。シェアハウスだと、洗濯機以外にも、いろいろなものが共有できる。そこも魅力ですね(瀬戸)

暮らしに必要なもの。それは気遣い

複数の人間が一つ屋根の下で暮らす以上、最低限のルールが必要となる。パウハウス高円寺でも、玄関、リビング、キッチン、浴室、トイレ、洗濯機・乾燥機など、共有部(共有物)に関する取り決めがある。しかしそれは、ルール(規則)というよりも、日常生活を営むうえでのマナー(気遣い)と呼んだ方がいいのかもしれない。家族との暮らしであっても、友人や恋人同士の同居であっても、他者と過ごす空間には、自ずと気遣いが生まれるのだから。

「当然、家族ではないし、学生時代の友達や職場の人間関係とも、ちょっと違う。居住者同士の距離感は、けっこう独特ですよ。プライベートな事柄に土足で踏み込むようなことはないですし、だからといって、冷たい間柄というわけでもありません(笑)。(檜館)

「それも心地よさの一つかもしれませんね。私の場合、入居した時に、皆さんが温かく受け入れてくれたのが印象的。この空間の中に、すうっと入ることができたんですよ(井上)



ちなみに、シェアハウスで暮らしていることを、同年代の友人や知人に告げると、即座に「面白そう!」という反応が返ってくるという。同時に「でも、自分には無理だな」とも言われるそう。その理由は「他人に気を遣うことになりそうだから」というものが大半らしい。

「もちろん、他の居住者に対しては気を遣いますよ。僕の場合、母親を除くと、家族が男ばかりだったので、女性に対する気遣いもいろいろと学びました(笑)。でも、気を遣うことが、息苦しさにつながるわけではないんです(吉川)

「そう。意識して気を遣う感じじゃない。無意識のうちに気配りをしている。それがあたりまえになっているんです(瀬戸)

取材は、終始、和やかなムードで進んだ。時にツッコミが入ったり、笑いが巻き起こったり。とって、なあなあ関係でもなく、ほどよい緊張感が保たれている。

今、古着をコーディネートに取り入れることはさほど珍しくないが、それと同じように、彼らは暮らしのあり方を上手にカジュアルダウンしている。しかし、まったく新しいスタイルというわけでもない。いわばそれは「温故知新(故きを温ねて新しきを知る)」。築50年以上の学生寮をリノベーションすることで、時代の気分とうってつけの環境が整い、それに対して、若い世代がヴィヴィッドに反応したということなのだ。

瀬戸さんの部屋は5畳ほどの広さ。寝台の上に大きな収納スペースが設けられている。机や椅子など家具類はあらかじめ備え付けられているので、まずは身のまわりのものだけで入居したとのこと